

## 樋口大介

## 『「変身」ホロコースト予見小説』

(河出書房新社, 2006)

江口陽子

## 1

『変身』が書かれた1912年は、カフカにとって大きな意味のある年だ。1月末に、友人のフェーリクス・ヴェルチュからゲーテ関連の文献を借りて読み、刺激を受けた。このときの日記に『「ゲーテのぞっとする本性 (Goethes entsetzliches Wesen)」という作文 (Aufsatz) の構想』(31. 1. 1912, S. 367)\*との記述がある。これは文字通り構想だけで書かれなかった、ということになっている。同年7月にはマックス・プロートとともに、ヴァイマルを訪れ、「ゲーテの庭の家」をスケッチする。そのスケッチと写真が本書に掲載されている。この庭と家は現在も保存され、本書の重要なテーマに関係してくるが、それは後半で述べることにする。著者が指摘するように、写真では建物の右側で伸びている木蔭が、カフカのスケッチでは、奇妙なことに炎のように見える。屋根の部分にも火炎のようなものが描かれている。筆者は、あるいはそれは創作への着想 (Einfälle) の火だったかもしれないと思う。

8月には後に婚約者となるフェリーツェ・パウアーと出会う。9月からは堰を切ったように『判決』、『失踪者』、『変身』が書き継がれ、何かが動き出した。カフカは『判決』を書いたときの日記で、着想を言葉に変える力を「大きな炎」に喩えている。

「いかにすべてのことが言われうるか、いかにすべての着想に — 極めて異質な着想にさえ — 大きな炎が用意されていることか、その炎の中で着想は消滅し、復活するのだ。」(23. 9. 1912, S. 460)

この時期のカフカが、書くことへの強いエネルギーに突き動かされていたのは間違いない。彼を動かした要因の一つに、世界戦争のような大きな動きへの予感があったと想定することは無理なことではない。この時代のヨーロッパの政治的状況からすれば、知識人の多くが、多少なりとも同様の不安を感じていたのではないだろうか。とはいえ、「『変身』で描かれていることが世界戦争でありユダヤ人迫害である」とか、「グレーゴルの身元にはナポレオンがいる」などと言われると、著者自ら認めるように、読者は困惑せざるをえない。本書は、『変身』が来たるべき世界大戦とドイツの敗北、さらにはホロコーストを予告し警告する物語であるとのテーゼに立ち、作品中の言葉そのものを詳細に検討することによって証明しようという試みである。本書のいわば上巻にあたる『世界戦争の予告小説家カフカ』(河出書房新社, 2005)では、『判決』と『変身』を題材としており、世界戦争勃発とド

イツ敗北の予告を読み取ることがテーマとなっている。上下巻合わせて一続きの論考だが、ここでは主に下巻である本書が対象である。

ただ、この本自体は、研究書というより、カフカやゲーテ、世界史をダシにした連想によるエッセイか、一種の小説とでも言った方がよいと思われる。研究書の体裁はとっているが、全体として仮説の論証は殆ど行われていない。著者は、カフカに寄り添いながら、彼が受けた多くの刺激の源を辿るうち、研究対象である作品についての考察を超えて、別のものを書き始めているようなところがある。カフカの心をよぎったかもしれないと著者が想像すること、またはカフカから得たヒントで読む世界史、というようなものを語っているように見える。だが、著者は読者に対し、本書は研究書ではないことを始めに断るべきだろうと思う。以下に、問題と思われる点をいくつか述べる。

## 2

著者は、カフカ作品は、同時代の作家ならびに文学愛好家のあいだに周知の事柄、彼らが読み・聞き・知っていた様々な事柄（著者の言う「公的なもの」）の引用のつなぎ合わせ・重ね合わせである、ということを前提にしている。「引用のつなぎ合わせ・重ね合わせ」という言葉から、ジュリア・クリステヴァによる一節を思い浮かべる人もいるだろう。「どのようなテキストもさまざまな引用のモザイクとして形成され、テキストはすべて、もうひとつの別なテキストの吸収と変形にほかならない。」（ジュリア・クリステヴァ、原田邦夫訳：『記号の解体学 セメイオチケ1』 せりか書房、1983、61頁）

だが本書が示しているのは、作家・作品の後世への影響関係を前提とする従来の文学研究への批判でもある「間テキスト性」の理論とは、およそ逆方向の内容である。様々なテキストからの『変身』への引用が、『変身』というテキストにおいてどのように変容しているか、また、それによって両者の間にどのような意味生成の場が生じているのかについての分析はなく、そこから両者に関する新しい「読み」が開かれているとも思えない。他の作家からの影響についての言及は多いが、その関連づけのしかたは恣意的なものが多く、関連の証明にはならないと言わざるをえない。

本書の前提に立てば、作品の解説は、『変身』に「引用されているものの発見発掘により達成される」ことになる。『変身』と他のテキストとの関係網の掘り起こしが本書の中心課題と言えるだろうが、その関係網は、著者自身のイメージや空想の網にとどまっている。ある一節なり一文なりが、誰が見ても『変身』への引用であると納得のいくような論証をしている部分を見つけるのは難しい。ともあれ本書の叙述は、形式上は、『変身』中の言葉に一致するものを他のテキストから見つけ出し、意味上の関連づけを行いながら進む。

著者は、カフカがどのような根拠から世界大戦とドイツの敗北、ユダヤ人虐殺を予見した、と言っているのか。本書は様々な根拠を入り組んだ叙述の中に提示しているが、大ま

かにまとめておこう。

世界大戦とドイツの敗北については、当時のヨーロッパ列強の動きに関する新聞・雑誌記事、戦争および歴史に関する著作物、他の作家の作品・日記などが強い影響を与えた。特にドイツの敗北に関しては、ドストエフスキーの『作家の日記』（1873～77年に雑誌『市民』の文芸欄に掲載した文章をまとめたもの）が重要な位置を占める。例えば、ビスマルクは1870年代に、「文化闘争」によってカトリック教会の諸権限をドイツ帝国の国家機構に吸収しようとしたが、カトリック側の頑強な抵抗に遭った。そのことについて、ドストエフスキーは次のように述べる。

「肝要なことは、この天才的政治家が、おそらく世界の政治家でただ一人、ローマ的根源がドイツの敵の間においても、いかにまだ強力であるかということ、これが将来これらの敵を一つに合体させるためのいかに恐ろしいセメントとして役立つかということ、評価し得たということである。」（『作家の日記』、1877年、第三章）

ビスマルクの「我々はカノッサへは行かない」という言葉とは裏腹に、1878年にはカトリック教会との妥協が成立する。カトリック教会は打撃を受けはしたが、ビスマルク政権がこの「闘争」で勝利することはできなかった。対ロシアについてもドストエフスキーは、普仏戦争以来、プロイセンはロシアとの同盟に依存することが「宿命的使命」だと述べている。そしてドイツは、1891年の露仏同盟、1904年の英仏協商、1907年の英露協商の成立により、三方を敵に囲まれる形となる。

著者が言いたいのは、カフカはドストエフスキーの見解に強く刺激され、近い将来ヨーロッパで世界を巻き込むような戦争が起き、ドイツは敗北する、という予感を得たということだろう。ローマ・カトリック的世界とプロテスタント的なプロイセン中心のドイツ帝国の対立に関して、ドイツがこうも不利であるとドストエフスキーやカフカが考えた根拠について、しかし、どういうわけか、著者ははっきりとした言及を行っていないように思われる。

それは、仮に本書の叙述内容を汲むとすれば、次のように説明できるかもしれない。神聖ローマ帝国の皇帝権以来、世俗権力が自らの権力の拡充を目論めば、当然、聖界権力であるローマ・カトリック教会権との間に摩擦を生じる。叙任権をめぐる闘争で教皇が皇帝に勝利した「カノッサの屈辱」に象徴的に見られるように、結局はローマ・カトリックの政治権力を凌駕できる者はいない。ナポレオンにしても同様だ。彼は、旧体制とともに教会勢力を隅に追いやりようとするフランスの政策を徹底させ、教皇の叙任権を無視する形で、自分で自分の皇帝戴冠を演出する。だが、トラファルガー海戦やロシアで敗退し、没落する。いわば近代における世俗権力であるドイツ帝国もまた、ヨーロッパの隅々まで浸透しているローマ・カトリック教会との確執を避けては通れない。欧州の土壤に根を張り、人々の生活と信仰を規定しつつ、綿々と生き続けるカトリックと、プロイセン中心のプロテスタント的・啓蒙的ドイツ、この対立においてはプロイセンの軍事力が強くても勝ち目は無い。さらに、東に控えるロシアは強大なうえ、ナポレオンの例と同じく、厳冬のロシアからドイツの軍隊も敗走するに違いない。およそこのようなことではないか。だが、

これはあくまで筆者が本書の内容を勘案して得た推測であり、本来著者が述べるべきことである。奇妙なことに著者は、このようなことをカフカが考えたうえで、『変身』にドイツ敗北の予見を書いた、という短いまとめの言葉すら述べていない。むしろそのような理由づけの明示を避けているかのようだ。ドストエフスキーの言葉と、「文化闘争」その他の史実を並べ、それらが『変身』に暗示されているという主張に終始し、それらの事柄が、『変身』という物語にどう生かされているかについての作品分析的言及は示されない。

ユダヤ人の虐殺に関しては、特に南アフリカ戦争でイギリスがボーア人に対して行った弾圧方法（生活基盤の徹底的破壊や集中収容所への強制収容など）についての資料から、また、フォンターネやヴァーグナーの著作における反ユダヤ主義的言動から、カフカはユダヤ人の将来に絶望的な確信をもった、と著者は考えている。さらに、ユダヤ人迫害が起きるその根底にあるメカニズムは、旧約聖書や帝国主義、シオニズムにも通底しており、それに対するカフカの洞察を導き出したものは、ゲーテに関するヴァイマルでの逸話と『ファウスト』の一場面に見られる「ゲーテのぞっとする本性」である、と言う。とはいえ、著者はこの点でも、「ゲーテのぞっとする本性」の内容をカフカがどう考えて『変身』に取り入れたか、ということの裏づけは出していない。示されているのは、推測だけである。

著者は様々な所で、世界戦争とホロコーストについてのカフカの確信が表れている場面を指摘するが、それは殆どが『変身』の各章の終りの部分で、自室を出たグレーゴルを父または妹が攻撃する場面に集中している。

虫に変身したグレーゴルは、合計3回、自室から居間へと這い出る。そしてその度に物理的、または心理的な攻撃を受け、自室へと逃げ戻り、最後は息を引き取る。そこには世界大戦の結果であるドイツの敗北とユダヤ人の抹殺が暗示されている、と著者は言う。部屋を出ると言う行為は、国境を越えた進出・侵略を意味し、カフカがグレーゴルという虫の形象にこめたものは、ユダヤ人のみならず、当時のドイツ帝国、ナポレオン時代のプロイセン、あるいはカフカの同時代におけるヴィルヘルム二世、さらにはフランスやナポレオンにも及び、幾重にも重なり合っている、と著者は読む。様々な歴史につながりを持つ『変身』の主人公の「身元」は一つではない。人物に限らず、国家を表すこともある。だが、この世界戦争とホロコーストを暗示していると著書が主張する部分についても、グレーゴルが攻撃を受けて傷つき死ぬという一点に、様々な史実やエピソードを重ね合わせているだけのように思われる。

因みに、『変身』第一章で虫になったグレーゴルが、痒みを覚えて脚で腹部を搔こうとする場面がある。腹の上には白い斑点があって、どうやら痒みはそこが原因らしい。グレーゴルは沢山ある脚の一つでそこを触るが、急に「ぞくっとして」引っ込める。この場面は、本書に示された読み方では、ナポレオンがロシア遠征で冬將軍に悩まされることの前兆を意味している。白い斑点は雪と冷気を暗示する。第三章でついに息絶えるグレーゴルの姿

は、ロシアで敗北を喫したナポレオンの他、鉄血宰相ビスマルクにも重なる。彼は文化闘争において「カノッサへは行かない」と宣言したものの、最終的には「カノッサに行く」ことになった。1077年、カノッサにおいて神聖ローマ皇帝ハインリヒ四世は、教皇グレゴリウス七世に許しを請うため冬の雪の中に立ち続ける。その雪の冷たさが、グレーゴルの腹部にある白い斑点と悪寒に表されており、ビスマルクが文化闘争の敗北で、その冷気を痛感したことを含んでいる、と著者は見る。同時に、ナポレオン同様ドイツもまた、極寒の冬という強みをもったロシアには勝てないことが暗示されていると言う。実際に、のちにヒトラーは対ソ連戦で大敗している、と著者は指摘する。

多読者カフカが、同時代と歴史に関する知識を蓄積し、活字その他の媒体に発表される様々な識見に触発され、ヨーロッパとユダヤ人の将来に対し予感なり予見なりをもったことは認めてよいだろう。物語を書くにあたり、また書いている最中に、上に述べたようなことも心象に浮かんだ可能性はあると筆者も考える。とはいえ、グレーゴルの腹部の白い斑点は、作品とナポレオンやビスマルクを結びつける論拠として評価できるほどに十分なものであるか、疑問である。本書は他にも、物語に引用されたとする論証を試みているが、その説得力については首を傾げたくなるものもある。例えば、グレーゴルの身元の一人にゲーテがいると指摘する場合、いくつか論拠をあげているが、「短足 (Beinchen)」を重要な指標として両者を重ね合わせている。ゲーテの足が短かったという複数の証言を引き、虫になったグレーゴルに多くの小さな脚 (Beinchen) があることをもって、グレーゴルをゲーテと同定する鍵と見る。もしカフカが実際にこの点を意識しながら『変身』を書いたとしたら、なかなか面白いエピソードではある。だがこの根拠づけは、ゲーテはグレーゴルの身元の一つである、という論をどの程度まで支えられるものなのか、判断に苦しむところである。

### 3

本書には示唆に富む部分もないわけではない。それは主に、ゲーテからドストエフスキー、カフカへとつながる読書の系譜、および作品のモチーフ継承についての指摘である。もっともこれも、イメージ先行の、単語レベルの言葉の関連づけであって、相互のモチーフ的関連性を論証しているわけではない。とはいえ、この部分が本論考では最重要テーマであるようだ。著者は、小説『変身』こそがゲーテの「ぞっとする本性」についての「作文」であると言う。カフカが思いを巡らせたと思われるゲーテの「ぞっとする本性」は、本書の基本モチーフである。これはゲーテに対する否定的な評価に伴い、ドイツ語圏ではよく知られている言葉であると言う。日記に記しているように、カフカにはこの言葉が心に引っかかっていたのであろう。それは、ゲーテや自分を含めた人間の側面に関する警戒なり怖れであっただろうと、筆者は想像する。

著者によれば、それは旧約聖書にも認められ、シオニズムにも通じる価値観である。すなわち、弱肉強食の論理、または自分に必要とあらば他者を押しつけ、相手のものを奪い取ることをも是とする、という考え方である。

著者は、カフカがドストエフスキーの『分身』やゲーテの『ファウスト』からも、インスピレーションを受けたと考える。確かに『変身』には冒頭からして『分身』を彷彿とさせる部分が見られる（朝、ベットの中であれこれ考えて、もぞもぞしている主人公の様子）。主人公は、ある日現われた自分の分身との葛藤の末、すべてを乗っ取られて駆逐される。著者の推測によれば、ドストエフスキーは、主人公と主人公の分身との間にある確執というモチーフを、ゲーテとレンツの関係から得ている。ヴァイマル公国の高官となったゲーテは、いち早くシュトルム・ウント・ドラング的熱狂から醒めて、レンツとも距離を置くようになる。まだ文学による社会変革という理想の追求を諦めていなかったレンツは、ヴァイマルにやってきて、活動を継続しようとゲーテに接近するが、ゲーテは自分個人を生かす生き方を選ぶ。ゲーテは、何かとうるさくまとわりつき、自分の出世にも影響しかねないレンツをヴァイマルから追放し、関係を切る。

著者の考えでは、ドストエフスキーは『分身』の主人公にレンツを、主人公の分身をゲーテに重ねあわせているが、両者が入れ替わっている部分もあると言う。さらに著者は、このロシアの大家作家は、『罪と罰』の主人公ラスコーリニコフに、ファウストの影を潜ませてもいる、と述べるが、この部分も『ファウスト』からの引用と『罪と罰』の当該箇所を文字通り並べて示しているのみで、単に似ているように見える箇所があるという提示にとどまっている。

カフカは『ファウスト』からも『変身』への端緒をつかんでいる、と著者は続ける。カフカは、ヴェルチュに借りた文献によって、ヴァイマル時代のゲーテが起こしたある事件のを知り、『ファウスト』の一場面にとそのことが描かれていると考えた、と言うのだ。ゲーテからドストエフスキー、ドストエフスキーからカフカ、ゲーテおよびドストエフスキーからカフカへとつながる読書の系譜を読み取ることができる、と著者は言いたいのだろう。やり方次第では、証明不可能なことではないかもしれない。だがここでは、その仮説のみが宙に浮いた形となっている。著者は『変身』と他の作品の一致点と見える部分をいくつも提示してはいるものの、それらの関係をつないでいるのは、著者のおそらくは該博な知識が流れ込んでいささか錯綜した連想に依存するものが多く、物語の構造や要素に関する比較と分析による論証とは言えない。誰が見ても両者が対応していると判断できる関係の提示にはなっておらず、およそ単語の一致や、場面の類似性の羅列に過ぎない。

先に述べたヴァイマルでの事件と『ファウスト』の当該場面について、本書に従って述べておこう。ヴァイマルの事件とは、ゲーテが出納係ベルトゥフに対して行った仕打ちのことである。ベルトゥフが結婚後に住もうと考えて楽しみにしていた感じのよい庭付きの家を、公爵を動かして買い取ったり、ある晩、新婚直後の夫妻の家に公爵と二人で押しかけ、室内を傷つけるなどの狼藉を働いた。ベルトゥフはこの件で熱を出し、一時重篤になった。庭付きの家とは、この文の冒頭でも触れた「ゲーテの庭の家」のことである。一方、ベルトゥフに対する仕打ちと似た場面が『ファウスト』第二部第五幕にある。この時点でファウストは、天地創造にも似た干拓事業に乗り出す。彼は海岸付近の土地を皇帝から手

に入れ、その一角に住む老夫婦フィレモンとパウキスを、メフィストを使って追い出そうとする。だが彼らは立ち退こうとしない。メフィストとその配下の者たちは、たまたま客となっていた漂泊者ともども、老夫婦を殺してしまう（著者曰く、ここでの漂泊者はレンツである）。夫婦の家は炎に包まれ、崩れ落ちた。著者によると、カフカは、ベルトウフからの家と庭の明け渡し、『ファウスト』における老夫婦殺害の下敷きになっていることを知っていた。その証拠が、カフカの描いた「ゲーテの家」のスケッチだと断言する。スケッチに見える炎のようなものが、『ファウスト』のこの場面を指し示している、と言うのである。

ヴァイマルのアウグスト公爵は、公国にまだ馴染んでいないゲーテを、是非とも長く留めたいと考えていた。ゲーテのほうもそれをよく知っていた。自分がベルトウフの庭付きの家を話題にしたらどうなるかも認識したうえで、その家のことを褒めた。ゲーテはまるで、かつての自分の行為を弁明するかのよう、このエピソードを『ファウスト』に挿入している、と著者は述べる。ファウストはメフィストに向かって、「交換をわたしは望んだ、強奪 (Raub) ではない」と言う。自分は殺してくれとは言わなかった、というわけだ。「宮殿」の場では、ファウストは礼拝堂の鐘の音にビクッと、フィレモンとパウキスの一件を思い出す。

「よそよそしい影たちにわたしは身震いする / 目に棘、足裏に棘だ / ああ、ここから遠くに離れていたい！」 (詩行 11155-11162)

著者によると、ドイツ文学者のアルブレヒト・シェーネが、この「目に棘、足裏に棘」という言葉は旧約聖書民数記第三十三章 51-56 の引用であると指摘している。神はモーセを通じてイスラエルの人々に、カナン地に入るときは、住民をすべて追い払い、異教の祭壇を破壊し、その土地を自分たちのものにせよ、と命ずる。

「もし、その土地の住民をあなたたちの前から追い払わないならば、残しておいた者たちは、あなたたちの目に突き刺さるとげ、脇腹に刺さる茨となって、あなたたちが住む土地であなたたちを悩ますであろう。わたしは、彼らにしようと思ったとおりに、あなたたちに対して行うであろう。」

著者に言わせれば、ゲーテは、ベルトウフに行った仕打ちに後ろめたさを感じながらも、自分の行為を正当化するための根拠を旧約聖書に求めている。自分も生き延びるのに必要なものを手に入れるためにしたことだ、旧約聖書でユダヤ人がカナンを略取せざるを得なかったのと同じだ、と。そして、このあまり愉快でない周到な釈明に、カフカはおそらく衝撃とインスピレーションを受けたのだと、著者は考える。ベルトウフについての逸話とフィレモン、パウキス殺害の場面に通底する、いわば加害者の側の論理は、興味深い指摘ではある。確かに、カフカもこの点には注目したかもしれない。しかし著者は、カフカ自身がこの論理の影響を受けて『変身』を書いたものかどうかについて、ベルトウフの逸話および、『ファウスト』と『変身』との関係を具体的に分析しているわけではない。著者は、グレーゴルの身元にゲーテとファウストがいることをもって、『変身』と『ファウスト』を関連づけている。ゲーテとファウストがグレーゴルと同一であるという根拠にもあやし



い所はあるが、それが『変身』で暗示されている理由は、読者に対して「ゲーテのぞっとする本性」の由来である旧約聖書への参照を促したいからであると、著者は推理するにとどまっている。つまり、カフカの言う「ゲーテのぞっとする本性」についての「作文」が『変身』である、というその根拠は、一つにはグレーゴルにゲーテ、ファウストが重なっているとの著者の不十分な同定である。さらにまた、カフカがその重なりを描くことを通じて『ファウスト』の「宮殿」の場面を仄めかしている、という著者の憶測によるものである。これでは『変身』が「ゲーテのぞっとする本性」についての「作文」だという証明にはならず、臆説にとどまらざるをえない。

本論考の主張によれば、『変身』とゲーテ、ドストエフスキーなどの大作家、そしてヴァーグナーや、19世紀ヨーロッパの大物政治家たちとを結びつけている引用関係の糸は、多岐に亘り、かつ錯綜している。確かに、多読で濫読気味の、言葉に極めて敏感なカフカは、読んだり聞き知ったことから、ヨーロッパの歴史と自身の「現在」に対して、彼なりの読み込みはしていたに違いないし、そうした「読み」を意識的・無意識的に作品に盛り込んだ可能性はあるだろう。だが著者は、カフカ自身が実際に、戦争やホロコーストを予見していたということに関する裏づけは行っていない。著者が行っているのは、カフカに影響を与えたと著者が考える他のテキストからの引用の列挙であり、かつまた、その符合すると見える点を補強するような断片的史実や、作品の一部分の提示である。さらにそこに作家、政治家のエピソードを散りばめて絡め合わせ、それらが『変身』に引用された、という推測を述べているのである。テキストとテキストを結びつける手法には、無理矢理などころがあり、本書を読んだ人は、疑問を覚えたのではないかと思う。一見、様々な作品と『変身』をつなぐ「ホロコースト予見」という言葉が、新しい読解を示しているかに見えるかもしれないが、この読み方は、引用されたテキストと『変身』との比較・分析によってあとづけられているわけではない。「ホロコースト予見」とは、実際は印象から直接に導かれた仮説であり、仮説にとどまっていると言わざるをえない。研究書として見れば、様々な資料によるあとづけと著者が称する部分は、破綻している。しかも、著者はその論拠づけと要所での論証の要約を、巧みに避け続けているふしがある。説得的なあとづけの用意がないからこそ、そうしているのではないだろうか。いずれにせよ本書は、研究書ではなく別のジャンルに位置づけられるべき書物であろう。

\*注)：カフカの日記については以下を参照し、本文には日付と頁数を示した。

Kafka, Franz. Kritische Ausgabe. Tagebücher. Hg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcom Pasley. Ffm. (S. Fischer) 1990.